

受賞者氏名	グレゴリー・ケズナジャット	
所属	グローバル教養学部グローバル教養学科	
受賞年月日	2023年11月28日	
国内・国外	国内	
授与機関等名称	早稲田大学	
受賞名	第9回早稲田大学坪内逍遙大賞奨励賞	
受賞(研究)内容詳細	<p>早稲田大学坪内逍遙大賞は、「広く芸術・人文学を包摂する文化の発展を支えるため、国際文化交流・文化創造・伝統文化の継承など、社会と公共の利益を増進することに寄与した文化芸術活動を顕彰することを目的とする」賞である。大賞と奨励賞の2種が設けられ、奨励賞は「創造的かつ革新的な文化活動を推進し、次世代文化の担い手となる気鋭の新人」を対象とする。</p> <p>受賞の理由は以下の通りである。  「グレゴリー・ケズナジャット氏は母語ではない日本語を使い、すぐれた創作活動を展開している。デビュー作『鴨川ランナー』では、英語指導助手として来日した主人公の「異邦人」としてのよるべない日々を清新に描いた。芥川賞候補作にも選ばれた『開墾地』の主人公は、父親のルーツであるペルシャ語、母語である英語、そして新しく学んだ日本語のあいだで葛藤する。言語や文化のはざまに身をおきつつ、日本語表現の新たな可能性を切り開く作家として大いに期待したい。」</p> <p>詳しくは添付の資料と以下のウェブサイトをご参照ください。  <a href="https://www.waseda.jp/culture/news/2023/09/29/22464/">https://www.waseda.jp/culture/news/2023/09/29/22464/</a></p>	

# 第九回早稲田大学 坪内逍遙大賞授賞式・祝賀会

主催 早稲田大学  
とき 二〇二三年十一月二十八日(火)  
ところ 授賞式 午後六時より  
リーガロイヤルホテル東京 二階サファイア  
祝賀会 午後七時より  
リーガロイヤルホテル東京 二階ダイヤモンド



早稲田大学坪内逍遙大賞事務局

〒169-0071 東京都新宿区戸塚町1-103 99号館(早稲田STEP21) 5階

早稲田大学文化推進部文化企画課内

TEL: 03-5272-4783 FAX: 03-5272-4784

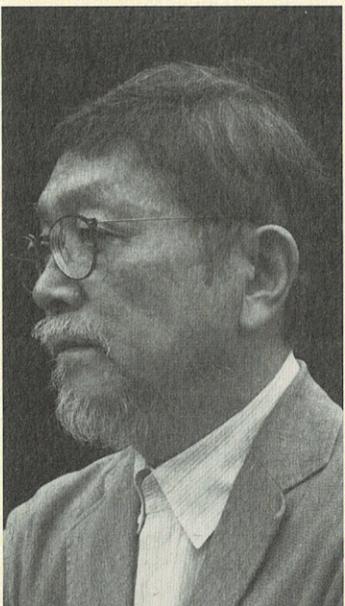
e-mail: shoyo-jimukyoku@list.waseda.jp

URL: <https://www.waseda.jp/culture/>

## 第九回 早稲田大学坪内逍遙大賞

### 大賞

池澤 夏樹 (いけざわ なつき)



一九四五年七月七日、北海道生まれ。埼玉大学理工学部物理学科中退。三〇代の三年をギリシャで、四〇五〇代の一〇年を沖縄で、六〇代の五年をフランスで過ごし、現在は長野県在住。ギリシャ時代より、詩と翻訳を起点に執筆活動に入る。一九八四年、文明への懐疑と人間の性を描いた『夏の朝の成層圏』で長篇小説デビュー。一九八七年発表の『ステイル・ライフ』で第九十八回芥川龍之介賞を受賞。その後の作品に、『母なる自然のおっぱい』(読売文学賞)、『マシアス・ギリの失脚』(谷崎潤一郎賞)、『楽しい終末』(伊藤整文学賞)、『静かな大地』(親鸞賞)、『花を運ぶ妹』(毎日出版文化賞)など多数。近著に『また会う日まで』。他に『池澤夏樹』個人編集 『世界文学全集』池澤夏樹個人編集 『日本文学全集』もある。

遙大賞は「国際文化交流・文化創造・伝統文化の継承など、社会と公共の利益を増進することに寄与した文化芸術活動を顕彰する」と謳っているが、池澤さんは創作・翻訳、そして日本文学全集における古典の現代語訳などにおいて、まさにそのすべての要素を満たしている方である。出版されたばかりの『また会う日まで』も、選考委員会において高く評価された。海軍将校であり天文学者でありクリスチャンでもあった秋吉利雄という実在の人物を主人公に、大量の資料を駆使しながら近代日本史、特に太平洋戦争へと向かっていく社会と、戦時下の日々を描く大作であり、歴史と切り結ぶ個人の姿が、その内面に寄り添いつつ説得力をもって語られている。

池澤さんが編集した日本文学全集のなかには「日本語のために」という一冊が設けられており、池澤さんに言語への特別な愛情があることが感じられる。日本語とは型にはまったもので

第九回坪内逍遙大賞を池澤夏樹さんに受けていただくことができ、大変嬉しく思っている。池澤さんについては、出版されている本の多さだけでなく、そのお仕事の幅の広さに誰しも目を奪われるだろう。小説だけではなく、詩、エッセイ、評論も書かれ、翻訳もされていて(それも英語だけでなくギリシャ語やフランス語も!)、さらに世界文学全集と日本文学全集の個人編集という大きなお仕事もある。海外に長く住まれた経験もあり、視野の広さ、見識の高さ、大量の読書に支えられた博識は、日本の文芸の世界においても突出している。世界文学全集と日本文学全集には多くの翻訳家や現役の作家が古典新訳の仕事で参加しており、時代のシンボルとなる大きなプロジェクトをまとめるチームリーダーの役割も果たされている。坪内逍

遙大賞は、古代から現代まで、絶えず変化し続けてきた。本書にはアイヌや琉球の言葉も収められており、広い視野から日本語の多様性と豊かさが見られている。翻訳文学としてシェイクスピア「ハムレット」第三幕の有名な台詞がさまざまな訳で収められているのも目を引くが、そこには坪内逍遙の訳文も二種類入っている。

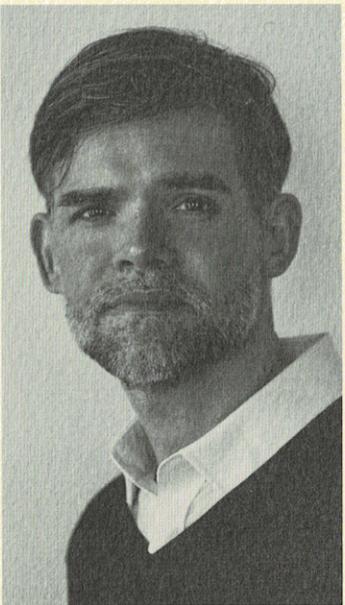
日本語を読み、書き、耕す、ということを経年続けてこられた池澤さんのお仕事を見ていて感じるのは、世界への強い関心と、同時代についての鋭い思考である。一定期間海外に居住されただけでなく、世界各地を(南極にまで!)旅してこられたことが、その都度作品として実を結んでいることにも驚かされる。混沌とした時代において、池澤さんの作品がこれからも世に送り出され、多くの人に届くことを願ってやまない。

## 第九回 早稲田大学坪内逍遙大賞

### 奨励賞

グレゴリー・ケズナジャット

(Gregory Kheznejat)



一九八四年二月二日、アメリカ合衆国サウスカロライナ州グリーンビル市生まれ。二〇〇七年、クレムソン大学を卒業後、外国語指導助手として来日。二〇一七年、同志社大学大学院文学研究科国文学専攻博士後期課程修了。現在は、法政大学グローバル教養学部准教授。二〇二二年「鴨川ランナー」で第一回京都文学賞を受賞。同年、受賞作を収録した「鴨川ランナー」を、二〇二三年「開墾地」第百六十八回芥川龍之介賞候補作）を刊行。

は思わず微笑を禁じ得ない。そのような作者の筆さばきのしなやかさは、この作品を一級の青春小説として成立させた。

さらに二〇二二年に発表された『開墾地』は、作者自身のルーツにまっとうから立ち向かった作品だ。留学先の日本からサウスカロライナ州に帰郷した主人公は、父親（小説の設定上は継父）のルーツであるイランのペルシャ語、母語である英語、そして新たに身につけた日本語の、三つの言語のはざままで人生を送ってきた。その言語的・文化的複層性は、これまでの「越境文学」の中でもとりわけ新鮮であるとの評価を得た。

作中、主人公の生家の庭にはびこる Kudzu (カッツー) という蔓草が、とても印象的な描かれ方をしている。実はその蔓草は、日本語の「葛」と同じもので、アメリカではその繁殖力の強さから、有害な外来種に指定されているという。アメリカという「開墾地」にはさまざまな異文

グレゴリー・ケズナジャット氏は、アメリカ・サウスカロライナ州の高校の外国語の授業ではじめて日本語に触れ、二〇〇七年に初めて来日して以来、本格的に日本語と日本文学に向き合うことになった。

その自身の経験を投影させたのが、二〇二一年に京都文学賞を受賞した『鴨川ランナー』である。英語指導助手として来日した主人公は、周囲からの「よそ者」扱いの連続に苛立つ。全編が「きみ」という二人称で書かれているが、その突き放すような視点には、異邦人に対する視線も表象されているのかもしれない。

もともと、作品のトーンはけっして暗いものではなく、むしろユーモラスでさえある。日本人のガールフレンドが主人公の胸に顔をうずめ、「海外の匂いがする」とつぶやくシーンに化が移植され、混淆してきた。それゆえ、アイデンティティーの根っこも、蔓草のように絡み合うだろう。Kudzuに、多義的な象徴性を読み取りたくなかったが、これ以上の深読みは控えた。

これまでもリービ英雄氏、楊逸氏、李琴峰氏など日本語を母語としない作家によるすぐれた文学作品が生み出されてきた。あるいは多和田葉子氏のように、「日本語の外に」出て、創作を続けている作家もいる。グレゴリー・ケズナジャット氏は「越境文学」を更新し、日本語表現の新たな可能性を切り開いていくことだろう。言語や文化のはざまに身をおく作家のさらなる深化を願い、満場一致で奨励賞に選出した。

## 早稲田大学坪内逍遙大賞

2007年、早稲田大学創立125周年を記念して、近代日本の文芸・文化の創造者ともいべき坪内逍遙の精神を、ひろく未来の文化の新たな創出につなげたいとの願いを込めて、創設いたしました。文芸をはじめとする文化芸術活動において著しい貢献をなした個人または団体を顕彰するものであり、大賞と奨励賞を授賞します。

坪内逍遙の生誕地である岐阜県美濃加茂市は、演劇人を対象とした「坪内逍遙大賞」を1994年に創設しております。坪内逍遙が取り持つ縁で、美濃加茂市と早稲田大学文化推進部は2007年4月に文化交流協定を締結しました。これを機に、美濃加茂市の「坪内逍遙大賞」と「早稲田大学坪内逍遙大賞」を、交互に隔年で実施することといたしました。

「早稲田大学坪内逍遙大賞運営要綱」<抜粋>

(制定の目的)

第1条 早稲田大学坪内逍遙大賞（以下「本賞」という。）は、早稲田文化の創造者ともいべき坪内逍遙の偉業を顕彰し、広く芸術・人文学を包摂する文化の発展を支えるため、国際文化交流・文化創造・伝統文化の継承など、社会と公共の利益を増進することに寄与した文化芸術活動を顕彰することを目的とする。

(授賞の種類)

第3条 本賞に次の2種を設け、その内容は当該各号のとおりとする。

- 一 大賞 国際文化交流・文化創造・伝統文化の継承など、社会と公共の利益を増進することに寄与した文化芸術活動を顕彰する
- 二 奨励賞 創造的かつ革新的な文化芸術活動を推進し、次世代文化の担い手となる気鋭の新人を顕彰する

## これまでの受賞者

	[大賞]	[奨励賞]
第1回 (2007年)	村上 春樹	川上 未映子
第2回 (2009年)	多和田 葉子	木内 昇
第3回 (2011年)	野田 秀樹	円城 塔
第4回 (2013年)	小川 洋子	小野 正嗣／山田 航
第5回 (2015年)	伊藤 比呂美	福永 信
第6回 (2017年)	柴田 元幸	アーサー・ビナード
第7回 (2019年)	是枝 裕和	福嶋 亮大
第8回 (2021年)	桐野 夏生	マーサ・ナカムラ

## 坪内逍遙 (1859 ~ 1935)

1859年（安政6年）現在の岐阜県美濃加茂市に坪内平右衛門・ミチの末子として生誕。本名勇蔵、のち雄蔵。号逍遙。1876年（明治9年）開成学校（後東京帝国大学）に入学。1883年（明治16年）東京専門学校（後早稲田大学）講師となる。1885年（明治18年）、『当世書生氣質』『小説神髓』を刊行、近代小説ならびに文芸理論の先駆けとなる。1890年（明治23年）提唱して東京専門学校に文学部（後の文学部）を創設。翌年文芸誌『早稲田文学』を創刊、森鷗外との間に没理想論争を展開するなどして時の文学・芸術理論に影響を与える。この前後、演劇刷新を提唱して史劇を次々に制作。1895年（明治28年）、早稲田中学校設立に参画、一時文芸活動を中断して教育事業に専念、教頭・校長として教育論の執筆、教科書の刊行などを通じ教育界に多大な影響を及ぼす。1904年（明治37年）『新楽劇論』『新曲浦島』を発表、芸術運動に新たな方向付けを行う。1906年（明治39年）文芸協会を設立、後の新劇運動の先駆けとなる。1920年（大正9年）数々の新作をものした歌舞伎改革から転じてページェントや児童演劇への関心を強める。1926年（大正15年）『逍遙選集』『沙翁全集』配本開始、1928年（昭和3年）『沙翁全集』全40巻を完結、同年『選集』の印税をはじめ私財を傾け、また広く浄財を集めて演劇博物館を建設。1933年（昭和8年）『新修シェークスピア全集』刊行開始、1935年（昭和10年）『全集』を校了、75歳で没。



## 第9回早稲田大学坪内逍遙大賞選考委員

奥泉 光 (委員長)	小説家、近畿大学教授
桐野 夏生 (副委員長)	小説家、日本ペンクラブ会長
松永 美穂 (副委員長)	翻訳家、早稲田大学教授
鶴飼 哲夫	読売新聞編集委員
堀江 敏幸	小説家、早稲田大学教授
武藤 旬	文藝春秋第一文藝部長
ロバート キャンベル	日本文学研究者、早稲田大学特命教授